

本会は、海外に派遣された自衛官と家族の健康を守るために必要な支援活動を展開していくことを目的としています。本会の呼びかけ人の一人として、ごあいさつさせていただきます。

私は、15 年近く前から、アジア太平洋戦争時に軍隊で精神疾患の診断を受け、国府台陸軍病院に入院した兵士のカルテ（病床日誌）を分析しています。国府台陸軍病院には総計 1 万人を超える精神疾患患者が収容されていました。その病床日誌は、終戦時に陸軍上層部から焼却命令がだされましたが、記録の重要性を認識していた病院の医療関係者が中庭に埋めて隠匿し、戦後になって掘り出し、保存されてきたものです。その原本は現在、千葉県にある国立病院機構下総精神医療センターに保管されています。

私たち研究グループは「病床日誌」を保管した精神科医たちの判断・努力に感銘を受け、その意思を受け継ぐために研究を始めました。私たちが分析した病床日誌は当時国府台陸軍病院精神科医の浅井利勇氏（故人）が複写した複写版ですが、8002 人分の病床日誌が残されています。私たちは、その中から精神障害者約 1300 人、知的障害者 484 人の病床日誌を分析・考察し、『日本帝国陸軍と精神障害兵士』（不二出版、2007 年 7 月刊）として出版しました。

アジア太平洋戦争は、一般戦傷病はもちろん、心を病んだ兵士も多数生み出しました。帰国後も敵の叫声や銃声の幻聴に悩まされたり、中国で殺害した住民の顔が悪夢として現れ、苦しみ不眠に陥ったりする兵士が続出しました。直接戦闘に参加していない状況でも、夜襲への恐怖や心理的緊張状態が多く、兵士の心を蝕んでいました。戦争末期には知的障害者も根こそぎ徴兵されていた事実も発見しました。

病床日誌には、患者家族が作成した身上調書や患者調査票が添付されているものがあります。ある身上調書には、父親から病院長宛の手紙が添付されていて、「息子が病気になってお役にたてず、申し分けなく、夜も眠れません。」「必ずや元気にして、再び戦地にて戦功をたてさせたい。」といった言葉が綴られていました。戦争は、戦場で戦う兵士だけでなく、無事帰還を待ち望む家族をも巻き込んで、苦しめていたのです。

昨年から南スーダンに派遣されている自衛隊員には「駆けつけ警護」の任務が付与されています。自衛隊員が戦闘に巻き込まれるリスクが大きく高まっています。現地での医療体制の不備が指摘される中で、彼らとその家族の精神的ケアは喫緊の課題です。どうか本会の活動へのご支援・ご協力をお願い致します。